



## 生きた職業能力開発指導とは何か

わが国の社会構造・産業構造が大きく変わりつつあるなかでの、技術的職業能力開発指導の取り組みについて考えてみたい。

いうまでもなく、能力開発指導は現在から将来にわたっての社会のニーズに対応していることを求められる。社会構造の変化が緩やかな時代は、指導の内容や進め方を大幅に変える必要性は少なかったかもしれない。しかし、今や指導者が過去に身に付けた内容・方法に安住できるような生やさしい状況にないことは、だれの目にも明らかであろう。まず、いくつかの論点をあげることにしたい。

1つは、多くの企業で人員・設備等の削減が急激に進んだ結果、企業内における人材育成の余裕が大幅に減少している。企業の将来を託す少数の中核的技術者養成には、従来のように時間と手間をかけるにしろ、大半は即戦力的能力を求められている。その一方で、急速な技術進展により、単純な即戦力的能力は短時日で陳腐化する可能性が高い。

その対応策としてのキャリアアップの重要性はいうまでもないが、いずれそのうちにでは間に合わない恐れがある。今や一芸を全うするとともに、常日頃から他の専門分野にも関心を向け視野を広げるのは当然であり、それだけに止まらず他芸ないしは多芸を身に付けることさえ必要となっている。

さらに、事業や製品を理解し、顧客の満足度を高めるために、単純分業制から個人が多様な仕事にかかわることが日常化している。技術者が顧客のニーズ動向を直接把握し、また製品のPR・販売にかかわる場面も大幅に増えている。このような状況では、対人関係、特に対話能力や説明能力が重要になる。単純な技術的能力だけでは動まらない時代である。

職業能力開発指導にかかわる課題はほかにも多々あるが、ここでは上記について述べることにしたい。

技術にも、時代を超えて続く普遍的基本的なものの一過性の流行とがある。普遍的基本的な技術を使いこなす技能の重要性は、いつの時代も変わらないが、それだけでよいわけではない。それを生かす時代感覚を磨かなければ、生きた技能とはいえない。

指導者は、自ら時代感覚を磨くとともに、授業を一とおり行ったというような通り一遍の指導になっていないか、自ら問い直す必要がある。真に大事なことは先生が授業・実習をしたことではなく、それを通して目標とする能力を学生が正しく身に付けたか否かである。何がどれだけできるようになるのか、なったのか、目標の具体的設定と達成度の具体的評価が不可欠である。

次に、視野の広い人材育成には、指導者自身が日頃から産業界に向いて社会の現状と将来について鋭い感覚を養うとともに、発展性を考えた新たな他芸に自ら挑戦することが肝要である。先生の自己満足のような技術指導を続けていては、時代に即した教育サービスの提供とは言いがたい。

最後に、われわれは職業人である前にまず人間であり、社会人である。対人関係の問題は、能力というより本来常識的マナーの範疇であるが、昨今常識が常識でなくなっている。技術的能力だけでは、就職も難しい時代である。能力を生かす職業につく機会をもてないのでは、何のための能力開発かを問われよう。指導にあたる者は、社会人の一人として学生の模範となる言動を求められている。

### こにし ただたか

略歴 昭和35年 京都大学工学部機械工学科卒業  
昭和40年 京都大学大学院博士課程修了  
京都大学工学部精密工学科助教授  
昭和57年 岡山大学工学部機械工学科教授  
平成元年 岡山大学工学部情報工学科教授  
平成13年 現職